

## アフリカ人権憲章（その三）



研究センター所長  
同志社大学教授  
安藤 仁介

日本のマス・メディアも最近になつて、やつと報道し

始めましたが、スーダン西部のダルフール地方におけるアラブ系武装勢力による黒人系住民の大量虐殺は、米国の大マス・メディアでは少し以前から、欧州の大マス・メディアでもそれに統いて、大々的に報道されていました。スーダンというのはエジプトの南に連なり、北側ではエジプト以外にリビア、西側ではチャド、中央アフリカ、南側ではコンゴ民主共和国（かつてはザイールと呼ばれていました）、ウガンダ、ケニア、そして東側ではエチオピアおよびエチオピアから分離独立したエリトリアの合計九カ国と国境を接する、アフリカで一番広い国家です。

スーダンはもともと現在のエジプトをも含むヌビアと

貸したわけです。  
さらにイギリスはスーダン独立を要求しつづけるアラブ民族系の運動を封じ込めるため、スーダンを南北に分割し、一九二四年にはエジプト軍を介した間接統治に替えて自ら直接統治に乗り出し、南部ではアラブ的な要素を一切禁止します。その結果、住民はキリスト教宣教師の保護に頼らざるえない状況に追い込まれました。またイギリスは自国綿業の原料補給地としてナイル川中流域の綿生産開発を奨励しました。こうした植民地政策のツケは、一九五六年に独立を達成したのちのスーダンそのまま持ち込まれ、最初に見たアラブ系武装勢力による黒人系住民の大量虐殺に繋がっているわけです。スーダンではまた、イスラム教徒とキリスト教信者との潜在的な対立も継続しています。

ダルフールの悲劇は、ある意味で西欧の植民地支配がアフリカ大陸に残した「悪しき遺産」の象徴です。ここで読まれた方は、すぐにルワンダとブルンディの悲劇を思い出されるでしょう。ルワンダとブルンディはともに、西欧諸国のかで遅れてアフリカの植民地獲得競争に加わったドイツの植民地でした。ところが第一次世界大戦で敗れた代償として、ドイツは海外植民地をすべて奪わ

して古代エジプト王朝の支配下に入りましたが、紀元前二千二百年ころ熱帯アフリカ奥地から黒人民族集団が移住して先住民を従属させ、自らの王国を成立させた後、四世紀にはエチオピアのキリスト教王国の、一四世紀にはアラブ系政権の、それぞれ支配化に置かれ、アラブ系支配のもとでイスラム化が始まりました。また地理的に見て、西アフリカ、地中海、紅海、インド洋を繋ぐ国際交易網の真ん中に位置し、その経済的重要性を維持していました。

このようにスーダンは全体として、民族的な多様性を持つことと並んで、交易のほかナイル川流域を中心に農耕、牧畜が発達した事実が示すように産業的にも多様性に富む地域でした。しかしこの特色は、一九世紀に入つてエジプトがスーダン征服に着手し、これに抵抗するスーダン自体のイスラム教団の反乱が、エジプト・イギリス連合軍の手で一八九八年に最終的に鎮圧されて以後、大きく変質させられます。イギリスはかねてより、「東方への道」を確保する手段としてスエズ運河の安全を保障することに腐心してきましたが、そのためには当時才マン・トルコの支配下にあったエジプトに対する影響力を強める必要があり、エジプトのスーダン征服に力を

れ、それらの植民地は「国際連盟の委任統治領」として、戦勝国であるイギリス、フランス、南アフリカなどの支配下に移されました。委任統治という制度は、いわゆる先進国が国際連盟から委任されて、原住民の福祉のためにかれらを統治する仕組みでした。

しかしながら現実には、統治は先進国の利益に即してなされました。ルワンダとブルンディは、同じくベルギーの植民地であったコンゴに隣接していたこととあって、ベルギーの委任統治領に組み入れられました。だがベルギーはドイツがしたのと同様に、ルワンダ、ブルンディに住んでいる少数派のツチ族と多数派のフツ族の対立を、自らの統治の便宜のために利用しました。つまり、少数民族のツチ族を軍人や官僚に採用することにより、多数派のフツ族の力を押さえつけたのです。そのため両国の独立後、フツ族が政権を取ると統治機構を少数民族の押さえ込みに使い、逆にツチ族が政権を取ると勢力維持のために多数派を押さえ込もうとしました。二つの種族の対立・抗争の背景には、まさに植民地支配の「悪しき遺産」があるのです。